

ドイツ指導者研修レポート



2015.3.21～30 静岡県指導者養成委員会コーチングスクール(CS)

CONTENTS

1. はじめに	2
2. 振り返りと提言	10
3. 報告	19-43
I. スカウティングシステム	19
II. ポジション別トレーニング	24
III. ボルシアMGアカデミーのトレーニング紹介 ..	33
IV. ゲーム視察	36
V. ボルシア MG スタッフとの Q&A	39

研修映像

 [You Tube](#) → ドイツ研修 U11 ゲーム視察

<https://www.youtube.com/watch?v=dY9U8ABkqA4>

 <https://youtu.be/48dqkZdK9qE>

①人工芝と天然芝の混合



②ボルシアMG トップ TR



③VVV 様々なゴール



1. はじめに・・・ ドイツ(ボルシア MG)・オランダサッカーに触れて

増田 裕(コーチングスクールマスター、伊豆総合高校)

①. ドイツ指導者研修参加者

増田 裕	伊豆総合高校	コーチングスクールマスター
武田 直隆	静岡市立高校	チーフインストラクター
佐藤 文彦	浜松市立高台中学校	3種トレセン委員
植松 弘樹	島田商業高校	2種技術委員
新山 真悟	浜松工業高校	コーチングスクール
大久保 翔悟	池新田高校	コーチングスクール

②. 研修のねらい

2014年ブラジルワールドカップ優勝をした背景には、EURO 2004年での惨敗を受け、10年賭けて育成の改革を行ったことが挙げられる。具体的には、ドイツサッカー協会が全国366カ所にトレーニングセンターをつくり、タレントの発掘と育成に力を入れたことである。(トレセン活動)また、プロクラブに育成のスペシャリストを配置し、トレセンで発掘されたタレントをエリート教育するシステムが確立された。ドイツには育成組織の格付け制度があり、視察したボルシア MG は最高ポイントである。タレント発掘・育成に課題がある静岡県にとって、そのような育成改革によりタレントを発掘し育成するシステムを学ぶことに大きなメリットがあり、そこが今回の一番大きな狙いである。

③. 主な活動

I. ボルシア MG (ドイツ) アカデミーの育成メソッド・タレントスカウト・哲学を学ぶ。

(1週間のTR、GAMEの視察、育成スタッフとのレクチャー)

II. VVVフェンロ (オランダ) 訪問。

(トップチームのTR・アカデミーU11のゲーム・クラブハウス視察)

III. U16 静岡県選抜のTR・ゲーム (VS フェンロアマチュア U19) 視察。

IV. EURO2016 予選「オランダ VS トルコ」観戦。

④. ドイツサッカー協会の改革(EURO2004年の予選リーグ敗退を受けて)

I. フィジカル重視からテクニック重視の育成へ

マリオ・ゲツェなどスペシャルな選手が生まれる。

II. U15までの366か所のトレーニングセンターの整備 (タレント発掘)

III. ストリートサッカーへのアプローチ

※誰でも無料で使用できるフットサルコートを設置 (2006年から全国1000コート)

⑤. ボルシア・メンヘングラートバッハ(ボルシア・MG)

創設年	1900年	クラブカラー	緑と白と黒
愛称	Fohlen (子馬)	所属リーグ	ブンデスリーガ1部
タイトル	ブンデスリーガ5回、ドイツカップ3回 ドイツスーパーカップ1回 UEFAカップ2回		

⑥. ボルシアMGアカデミー(育成格付け3つ星、*最高ポイント)



● グランド施設

天然芝7面 (人工芝と天然芝の混合も含む)

※U16~U19、

セカンド、トップが使用

人工芝1面

フットサルコート2面

GK練習用コート1面

クラブハウス

※さらに施設を拡大予定

●カテゴリー区分

カテゴリー	人数	TR・ゲーム頻度（すべて90分TR、土日どちらかOFF）
U9	10名（内GK1）	火・木の2回TR、週末ゲーム（7対7）
U10	10名（内GK1）	火・金の2回TR、週末ゲーム（7対7）
U11	12名（内GK1）	月・木・金の3回TR、週末ゲーム（7対7）
U12	17名（内GK2）	火・木・金の3回TR、週末ゲーム（9対9）
U13	19名（内GK2）	火・木・金の3回TR、週末ゲー（9対9、11人制）
U14	21名（内GK2）	月・火・木・金の4回TR、週末ゲーム
U15	24名（内GK2）	月・水・木・金の4回TR、週末ゲーム
U16	24名（内GK2）	月・水・木・金の4回TR、週末ゲーム
U17	25名（内GK2）	月・水・木・金の4回TR、週末ゲーム
U19	28名（内GK2）	月・水・木・金の4回TR、週末ゲーム

※GK（すべてのGK）スペシャルTRを月・木の2回実施

●哲学(メンタリティー) ※クラブハウスの所々に掲げてある。



「ボルシアの評価するものと強み」

勇気、
活動力、
尊敬、
公正な態度、
チーム・スピリット、
信用と忠誠、
情熱、
献身と正直さ、
向上心、
辛抱と冷静さ
責任感、
礼儀・良心・時間厳守、

毅然とした態度、

継続性と謙虚さ、

信念、

意志、

オープンマインド、

規律、信頼性、

努力、

忍耐



「美德とするもの」

- ① 責任感
- ② 学ぶ準備
- ③ 努力
- ④ 毅然とした態度
- ⑤ 規律
- ⑥ チーム・スピリット
- ⑦ 勇気
- ⑧ 尊敬
- ⑨ 決心
- ⑩ オープンマインド
- ⑪ 情熱

● シンプルで、効率の良い練習

練習の構成は、日本で行われている内容と変わらず、至ってシンプルでゲームに直結するものであった。主な内容は、コーディネーション、技術練習（パス・ドリブル・シュート）、攻守の切り替えがあるポゼッション、テーマや課題に沿った練習、ゲームなどで構成され、すべてのカテゴリーで90分の練習である。また、ジュニア年代では1対1も積極的に行われていた。1つのカテゴリー十数名の人数に2名のコーチがついており、グループに分け、数カ所で行うことにより待ち時間が少なく、プレーの確保ができています。ゴールから逆算した練習が合理的かつ一貫性を持ちながら行われていた。

● 試合で生きるシュート練習

下のカテゴリーではシュート練習の割合が多かった。シンプルなドリルのシュート、パスワークを入れたシュート、中央・サイドからのシュートなどバリエーションが多い。ま

た、両方の足で打つ、GKをつける、1対1からのシュートなど、内容がしっかりとオーガナイズされていた。

●ポジション別のメソッド(プレーモデル)

クラブ独自にポジション別のメソッドを持っており、すべてのカテゴリーの共通理解がされている。ノーマルな練習とは別に、ポジションに特化した練習も行われている。

●～U12スタッフのハンスコーチからの言葉(育成の姿)～

「育成年代の指導では、選手自身の判断力や解決能力を上げるためのコーチングを心がけている。」

「走る・闘うは当たり前、その上で何ができるか」

「U12の練習でのモットーは、子どもが自然とサッカーを楽しめる雰囲気を作ること」

⑦. コンタクトプレーの質向上へ

日本人はコンタクトプレーが不得意である。ドイツ人は元々肉体的に強い利点もあるが、サッカーのプレーの中でどのようにコンタクトプレーが身に付いていくか、この研修で興味があった。

ボルシアMGのU12ハンスコーチに、コンタクトプレーのアプローチをどのようにしているかの発問をしてみたところ、コンタクトプレーの際、反則あるいは少々危ないコンタクトプレーでも敢えて笛を吹かない場合もある。また、ボルシアMGU12はコンタクトプレーが今の課題であると答えた。現にU12のTR(ゲーム)の中で随所にコンタクトプレーが見られ、反則を取られてもおかしくはないシーンでも笛が鳴らなかった。選手も動じず、プレーを続けていた。そして、フェンロ(U11・オランダ)VSデュイスブルク

(U11・ドイツ)のリーグ戦を観戦した時もお互い激しいコンタクトプレーが見られたが、笛は簡単には吹かれないことがよくわかった。私が見ている日本のレフリングとは違いを感じた。U11でも当たり前のようにコンタクトプレーが行われる環境を日本でも作りたい。

⑧. VVVフェンロ(オランダ2部)での藤田俊哉との出会い

過去、吉田麻也、本田圭佑、大津佑樹が所属していたVVVフェンロに清水市（現静岡市清水区）で育った元ジュビロ磐田の藤田俊哉さんがトップのチームのコーチとして活躍されていた。アジア人で欧州のプロクラブのトップコーチをしているコーチは藤田さんしかいないことを考えると大変な挑戦であることは容易に想像がつく。トップの練習と強化試合を見る機会があったが、スタッフはもちろん、選手とのコ



ミュニケーションする姿を見て同郷人としての誇りを感じた。また、お話も聞くことができ、オランダ（欧州）の育成事情など深みのあるサッカー談義となり、貴重な経験となった。その中で印象に残ったものを1つだけ紹介したい。「オランダ（欧州）での育成の練習メニューは至ってシンプルなもの、特別なメニューではなく、選手経験があるコーチなら一度はやっているメニューばかりである。日本人の方がよく考えられたオーガナイズでメニューを立てていることが多い。自信を持っていいよ」とエールと同時に育成には魔法のトレーニングは存在せず、基本となるものをくり返し反復することが大切であることを言っていたのだと感じた。今後の藤田さんの動向が楽しみである。

⑨. 総括

今回のドイツ研修では、ドイツサッカーの歴史とサッカーの持つ力の大きさに感銘を受けると同時に、日本がドイツに追いつくには、かなりの時間と労力がかかると感じた。ボルシアMGを中心とした研修であったが、サッカー文化が根付き、脈々と受け継がれたメンタリティ（ゲルマン魂）の一端を見ることができたのは、研修生にとっては大きな経験となったはずである。また、ボルシアMGの美德にするものでは、日本でも同様に評価される価値観であり、好感を持たれた。一方、サッカーのプレーにおいて、ゴールに向かうプレーが評価されることが前提にある。日本は、単にテクニックがある、あるいはボールをつなげることが上手というものが評価される傾向が強かったかもしれない。U16 静岡県選抜の試合を通して、日本人の選手の方がボール扱いは巧みではあるが、欧州の選手はゴールに向かったシンプルなボールコントロールの質が高いと感じた。育成年代でのボール扱

いや失わないスキルは、とても大切なスキルだが、ゴールに結びつくように発揮させたい、そして、ゴールを奪うためのポゼッションを向上していく必要があると再認識した。毎年、**静岡県選抜は海外遠征を行うが、海外でしか体験できない感覚が、その後の世界基準としての物差しとなる。また、指導者も同じことが言え、この研修は静岡の強みでもある。**今後も継続してほしいと切に願う。

2. 振り返りと提言

☆ **世界と戦うために、静岡の育成で強調して取り組みたいこと**

①ゴール前の決定力や球際の強さ

②1対1のスキルや駆け引き

③ゴールを奪う・守るためのポジショニングと強いメンタリティー

日本サッカーは、近年急激に進歩・発展し、ドイツ・オランダなどの強豪国とも戦えるようになってきた。しかしながら、ワールドカップで勝利できるかといえば、大変難しく、また、優勝となれば、さらに難しいと思われる。試合を通してのボール保持や攻守の組織的な連動に関しては、肩を並べつつある。劣っているものは、ゴール前の決定力や球際の強さ、1対1のスキルや駆け引き、ゴールを奪う・守るためのポジショニングと強いメンタリティーに差があると思う。また、この研修でもその差を強く感じた。育成年代では、ゴールをつけた練習、ゴール前の練習、1対1の練習を行い、そして、拮抗したゲームが多く行われ、ゲームの駆け引きや勝負に執着心が持てるような大会やリーグ戦が展開されていくことを願います。

増田 裕（伊豆総合高校）

◆ 変わらないサッカーの本質、子どもの本質

今回の研修で最も心動いたゲームがある。それは欧州選手権予選のオランダ vs トルコでもブンデスリーガでもなく、『デュイスブルク U-11 vs VVV フェンロ U-11 のゲーム（地域のリーグ戦）』だった。そこには、まさしくサッカーの本質と子どもの本質があったように思う。

サッカーについて

①ゴールへ直線的に向かうプレー、それができない時にはつなぐプレー

②ボールを奪うための球際の強さと激しさ（このボールを絶対奪ってやろう）③ゴールを守るための全身を張ったプレー（最後のゴールだけは絶対に譲らない）

④ゴールを決めるために泥臭く体を投げ出すプレー（絶対に決めてやる）⑤勝利に歓喜する選手、敗戦に悔しがる選手、である。

このゲームを見た次の日、ボルシア MG アカデミーコーチに次のような質問をしてみた。「例えばポゼッションのためのポゼッションという言葉が日本にはあるが、ドイツではどうか？」答えは「ない。理由は、常にゴール（目的）から逆算してプレーの選択をしてい

るからである。」とのことだった。U-11 なのに『サッカー知っているな〜』と唸るゲームだったが、それはドイツとオランダが持つサッカー文化と歴史のなせる技なのかもしれない。しかし、我々がドイツやオランダを追い越すためには、サッカーの「ゴールを奪い、ボールを奪い、ゴールを守る」本質を指導者が理解し、コーチングとティーチングのバランスを調整しながら子どもたちに向き合っていく必要があると感じた。

さらに、子どもは本来競争が好きであり、勝つことに喜び、負けることに悔しがる性分だと思う。しかし、日本の子どもたちはどこか（の 카테고리）でそれを忘れてしまっている（もしくは指導者が奪っている！？）のではないかと強く感じさせるゲームだった。自分の周りを見ても、淡々とトレーニングをしてゲームを終える、という光景は少なくない。ドイツで見たトレーニングからゴールに（心から）一喜一憂している子どもたちの姿を自分の周りでも作っていきたい。そのためにも、様々なカテゴリーの指導者同士で議論していくことが大切だと思った。

◆ 一貫指導の在り方

2004 年欧州選手権で予選敗退したドイツが、ドイツ協会を中心にして目指すサッカーやトレセン制度、クラブ格付け制度などを抜本的に改革したのは有名な話である。それまでのフィジカル優位なサッカーから「テクニク」優位なサッカーへの大転換である。改革から 10 年後のドイツを今回視察したが、テクニク重視のサッカーが若年層から浸透していた。先述のデュイスブルク U-11 vs VVV フェンロ U-11 のゲームも大変テクニカルなゲームだった。ボルシア MG アカデミーもアンダーカテゴリーからテクニクを重視しているトレーニングを毎日行っていたし、U-17 のボルシア MG vs ビクトリアケルン（日本のプリンスリーグか）もテクニカルなゲームであった。

ドイツ全体で幹を共有し、10 年間継続したからこそそのワールドカップ優勝だろう。この 10 年間で、ゲッツェ、エジル、ロイス、ミュラーなどのワールドクラスのテクニカルなタレントも出ている（一方でドイツらしい屈強な CB やボランチのタレントも出続けている）のもうなずける。幹を共有しながら、枝葉の部分は独自のメソッドを確立していくことの大切さを改めて感じた。

☆ 静岡独自のメソッド構築

◆ 飯島健二郎氏（トライアスロン女子監督）

『列強のコピーをしているうちは近づくことはできても追い抜くことはできない』

最後は、独自のトレーニングを行うことが大切である。

今回のドイツ研修で強く感じたことが2つある。日本の指導者の方がサッカー（のトレーニング）についてより細かく考えている。（自信をもっていいのではないか！？）。このままでは日本はドイツに追いつく（追い抜く）ことはできない。遠征中に、VfV フェンロのコーチをされている藤田俊哉さんも「日本人（コーチも含めて）はもっと自信をもていいよ。」とおっしゃっていた。トレーニング方法についてはドイツよりも日本の方がより細かく、ゲームで起きる現象について選手に落とし込んでいる印象も持った。しかし、ドイツの圧倒的なハード面を目の当たりにすると、世界は立ち止まってはくれないとの危機感を抱いた。ドイツの育成方法に学ぶ点は多々あるが、それを真似しているだけでは不十分である。

静岡県に置きかえると、体格やサッカー人口に勝る関東や関西に勝つためには、やはり「**テクニックと判断**」の質を上げ、「**サッカー理解**」を進め、選手の「**自立**」を促していくことが強い静岡・サッカー王国静岡を取り戻すためには不可欠ではないだろうか。静岡独自のメソッド構築のために、自分自身が学びを続け、多くの指導者の方々と議論をしていくことが大切だと強く感じます。

最後に、今回このような貴重な体験をさせて頂いた関係者の方々に深く感謝をし、振り返りと致します。ありがとうございました。

佐藤文彦（浜松市立高台中学校）

◆ ドイツ研修とCSから繋がったこと

■ ゴール前のトレーニング

コーチングスクール（池谷氏の講義）でのゴール前のトレーニングが不足している指摘や SBS カップでの講習会（メキシコスタッフのトレーニングの順番）1. コーディネーション&テクニック 2. ゴール前の TR 3. ポゼッション 4. ゲーム といったトレーニングの組み立て方からも**ゴール前のトレーニングの重要性を再認識した**。ボルシア MG では、様々なトレーニングの中にゴール（大・中・小・マーカー）が設置され、U15 以下は必ず GK を置いたパス&コントロールを組み込んだシュートトレーニングを行っていた。決定力の向上や「あのシュートが決まっていれば」を改善していくためのヒントがあると感じた。

■ ワンタッチパスのクオリティ トレーニングにディティールがある

ボルシア U12 のシュートトレーニングでは、ワンタッチで出されるインサイドキックがボールの中心を捉えたグラウンダーで質の高いボールが供給されていた。日常のトレーニングの質を上げ、継続する重要性を再認識させられた。

U16 静岡県選抜の TR をボルシア MG のスタッフがレクチャーしてくれた。その際、U12 と同じようなパス&コントロールからのシュートトレーニングでは、ボールをワンタッチで落とす選手に対して「足のどちらに出すか」とコーチから問いかけがあった。コーチからは「組立では相手から遠い足を使うこと」とゲームシチュエーションに即した細かい部分のコーチングが行われた。指導者側のゲームシチュエーションのイメージとディテールを持つことの重要性を再認識させられた場面であった。

コーチングスクール（和田氏）の講義の中で未来のサッカーはワンタッチパスが増え、サッカーのスピードが上がるとの指摘があった。ボルシア MG の U16 以上のトレーニングの中でもワンタッチのポゼッションやゲームが行われていた。一方、U12 のトレーニングでは 3 人の選手と 1 人のコーチでトライアングルのパス練習を繰り返し行う光景も見ることができた。「技を身につけるということは、量的な積み重ねによって質的变化を起こすこと」（空手家 南郷継正）の言葉にも繋がり、数年後の世界のサッカーの潮流や選手の将来像をイメージし、選手に寄り添いながらコーチ自身も成長していかなくてはならないと強く感じた。

◇ SHIZUOKA メソッド

①「あのシュートが入っていたら」「決定力の差で負けた」をなくす為に

毎日のトレーニングの中にパス&コントロール&シュートを入れましょう！！

② ゴールキーパーは特別なポジションだから……

コーチが週 1~2 回は GK 専用のトレーニングを行きましょう。

GK の発掘と育成（4 種・3 種、3 種・2 種の合同（連携型）トレーニング）の機会を！！

③ 上手い選手の基準を持ちましょう。

ボール扱いの上手い選手からサッカー上手な選手を評価しましょう！！

④ タレント発掘へ

より多く得点を獲る選手にスポットを！！

※ドイツではアンダーカテゴリーの大会においても得点者の一覧が作成されます。

武田直隆（静岡市立高校）

◆ 要求するということ

指導者の大きな仕事の一つにある選手に**“要求する”**ということに着目してドイツの文化と合わせて、私なりの意見を述べさせていただきます。

私は、日本の選手は要求し続けていないと変化していかない選手が多いと感じていた。その要求する内容についてはまだまだ日本サッカーはサッカーをする上でのベースになることを要求しているのだと考える。例えば、球際を強く行く。ヘディングで負けない。相手よりも走る。練習からミニゲームなどで負けない。などです。しかし、ドイツではそのようなベースの部分はサッカーをしている全ての選手にあるように感じられた。背景には、民族間の紛争があり、各地区で戦いが絶えずあった。だから今でも”この町には負けたくない。”だから「この町のビールはうちの町には置かない」、スポーツ商品店やショッピングセンターでも「自分の町のユニフォーム以外置かない」と言う。サッカーだけでなく〇〇の町には全て負けたくない気持ちを感じた。だからサッカーというスポーツでも負けたくないという気持ちが自然に出てくるのだと考える。

その負けたくない、つまり闘えるというベースがあり、その上に指導者は選手に技術や戦術を身につけさせるべく要求をするのだと考える。また、サッカーの技術のベースである“止める・蹴る・運ぶ”また“ボールを受ける前の動き”についても、U13年代までに多くの指導者が体で覚えさせてベースにし、U14~15でその選手に特化した練習をし、ポジションのスペシャリストを育てているように感じた。

大久保 翔悟 (池新田高校)

◆ もう一度この地へ来たい

成田からウィーンを経由してドイツのデュッセルドルフ国際空港までおよそ12時間のフライトであった。降り立ったドイツの地はまだ肌寒さの残る気候であった。空港に停車してあるタクシーが「メルセデス・ベンツ」や「BMW」のものばかりで、田舎者の私にとってはドイツに来たという実感がますます高まった瞬間であった。

ドイツ連邦共和国は、ヨーロッパ大陸における経済及び政治的な主要国であり、多くの文化、技術分野における歴史上重要な指導国のうちの1つである。豊かな文化及び政治の歴史で知られ、多くの影響力のある芸術家、科学者及び発明家の故国である。19世紀後半までは、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを初めとする、クラシック音楽史上に名を残す作曲家や演奏家を多数輩出した。人口は8,060万人で、EUでは最大の人口を有する国でもある。

ドイツは西欧および中欧に属し、北にデンマーク、東にポーランドとチェコ、南にオーストリアとスイス、南西にフランスとルクセンブルク、そして北西にベルギーとオランダと各々国境を接している。総面積は357,021 km²である。この面積はヨーロッパ第7位、世界第63位である。(ちなみに日本は、総面積377,972 km²で世界第62位である。)

ドイツはサッカーが非常に盛んな国である。通常ドイツのスポーツ競技団体はドイツスポーツ連盟(DSB)に加盟しているが、ドイツサッカー連盟(DFB)は会員数630万人以上を

数え、他の団体と比べても規模が大きい事で知られる。FIFA ワールドカップにおいては、4度の優勝と4度の準優勝をしており、現在も安定した強さを持つヨーロッパ屈指の強豪国である。優勝回数4回は、5回のブラジルに次ぎ、イタリアと並ぶ第2位の記録である。2006年には1974年のワールドカップ・西ドイツ大会以来32年ぶりにワールドカップが地元開催され、3位入賞を果たした。女子代表も2003年、2007年のFIFA女子ワールドカップを連覇、UEFA欧州女子選手権では6連覇をしている強豪である。国内のクラブチームの活動も盛んで、トップリーグであるフースバル・ブンデスリーガは欧州屈指のレベルを誇り、バイエルン・ミュンヘン等の名門クラブが鎬を削っている。

ドイツに来てみて私が感じた事、それは「もう一度この地へ来たい」ということであった。私にとって、海外サッカー研修は初めてであり、見るものすべてが新鮮であった。10日間サッカーに触れ、サッカーについて考え、いろいろな議論や夢を語る事ができたのは本当に価値のある時間であった。今回の研修で感じた事を以下に記していきたい。

I. サッカーを愛しているし、サッカーが文化になっている

ドイツ国内には、サッカーグラウンドが無数にある。どこへ行ってもサッカーをしている子どもたちがいるし、サッカーを見るのを楽しみにしている人たちがたくさんいる。自分の故郷や住んでいる地域のクラブを愛し、応援し、生活の一部となっている。親が応援しているチームは子どもも一緒になって応援し、脈々とその血が受け継がれていく。何代にもわたって継承されてきたサッカーやクラブチームへの愛はそのチームがゲームで戦うエネルギーとなり、また、地域を活性化させる起爆剤となっているように感じた。

サッカーが文化になっているという観点からもうひとつ話をしたい。U-11のリーグ戦を観戦したときのことである。主審を務めていたのは中学生年代の子どもであった。主審は自信をもってジャッジをし、白熱した好ゲームを絶妙にコントロールしていた。この年代でこれだけのジャッジができるのはすごいと感じた。サッカーに関わる全ての人がサッカーを愛し、サッカー文化の中で生きていることが非常に伝わってきた。

II. クラブ理念が明確化しており、そのもとで選手が育成されている

今回お世話になったボルシア・メンヘングラートバッハ(以下ボルシア MG)は、サンタデル銀行というスペインの銀行やドイツ国内の国営会社から巨額の支援を受けて運営をしているビッグクラブである。スタジアムや練習グラウンド、クラブハウス、育成システムなどハード面での充実ぶりは圧倒されるものがある。しかし、**素晴らしいのはハード面ではなく、むしろクラブの確固とした哲学であると感じた。**

ボルシア MG というクラブがどのようにして歩んできたのかという軌跡をきちんと残し、これから先どのようなクラブにしていきたいのかというコンセプトが明確化している。そ

のために必要な投資を必要な額だけ必要な場所に行っていると感じた。一切の無駄がない。それは選手育成に関しても同じである。各年代で育てていきたい選手像がはっきりしているため、指導者や選手も迷ったり焦ったりしている感じを一切受けない。例えば、U-12までの年代では「基礎基本の徹底習得」をさせる。基礎基本の習得とは、ドリブルであったりキックであったりボールコントロールの事であるが、どのようなキックを習得するか、どのようなドリブルができなくてはいけないか、細かく指導されている。もちろん、指導していく技術はトップチームのサッカーから逆算されたものである。コンセプトがはっきりしていると良い面は他にもある。選手が伸び悩んでいたり、指導者が期待したような成長が見込めなかった場合には、どの部分に戻ってアドバイスをしていけばよいのかわかるので指導にブレがない。修正する「ポイント」と「方法」がはっきりしているのでクラブが理想とする選手をきちんと育成していくことができているのではないだろうか。

Ⅲ. 教員がよいサッカー選手を育成することができるか

ドイツに限らず、世界ではサッカーが「ビジネス」になっている。指導者という職業が確立され、それによって生計を立てることができている。日本ではこのような環境整備が遅れているのではないだろうか。特にジュニア年代の指導者に大きな違いがあると感じる。サッカー選手を育成していくうえで、ジュニア年代を強化していくことは必須条件である。その大事な年代に日本では体系的な指導が確立されていないのが問題であると感じた。体系的な指導とは、どのような選手を育成していくのかという明確なプランを打ち出し、そのプランの基、具体的な指導計画を立て指導をしていくことではないだろうか。できているようで実は深くまで考え、実践されているかと言えばそうではない気がする。今一度、再考し構築し直す必要があるのではないだろうか。

さらに、選手の指導をできる「プロの指導者」の数が不足しているように感じる。この問題は今すぐに解消できるものではないが今後取り組んでいかなければならないものの1つであると感じている。現時点で考えてみたいのは、ジュニア年代の指導者の数は本当に少ないのだろうか？ということである。もっと言えば、ジュニア年代に関わることでできる指導者を確保していくことは難しいのだろうか？例えば、2種の先生にはサッカーを愛し情熱を燃やしている人がたくさんいる。そのような先生方が各地区でサッカー教室を開催し、継続的に指導に関わっていくことができるのではないだろうか。また、その場にジュニア年代の指導に関わりたい指導者にきてもらい指導者養成を兼ねることもできるのではないだろうか。種別を越え、指導者同士が手を取り選手育成をしていくことが求められているのではないだろうか。教員である我々がグラウンドの提供をしたり、現場に行き指導をしたり出来ることは必ずあるはずである。ジュニア年代の指導は今後のサッカー界の発展を担っていく大きな主軸である。そこの強化が急務であることは間違いない。

iv. 日常とは違ったものに触れることの意義

日本とは全く違った文化を持つドイツに行くことができ、自分の視野を広げることができたと思う。子どもたちのため、生徒のためと思ってやっていたことが本当に正しかったのか、いい選手を育てるために自分は勉強不足だったのではなかっただろうか、いろいろな事を考えさせられた。また、サッカーだけでなくドイツの街並み、様々な人種がいる中で人々が共生している姿をみて学べた部分も多い。例えば、ドイツであったとしても英語はほとんどの人が話せていた。信号機で車いすの方が四苦八苦している様子を見るとすぐに車いすを押して助けてあげている人がいた。(コーディネーターの重松さんがそうであった。) 日本にいと、閉鎖的であるがために気づかなかったが、世界はどんどん進んでいると感じ、そこから日本は取り残されてしまうのではないかという危機感さえ覚えてしまう。**その場所に行って、見て、聴いて、感じることは非常に大切であると実感した。**このような経験は何も海外に出るだけではないと思う。自分がいる日常の世界から一步踏み出せば視野を広げることにはできると思う。指導者として選手にいい刺激を与え続けていくためには、指導者もよりたくさんの刺激を受けることの大切さを痛感した。

この研修に参加させていただき本当によかったと思っている。この経験を現場に還元していくことはもちろん大切で私の使命であると感じている。また、今後このような研修に参加したいという指導者がたくさん出てくるように今回の経験を伝え、指導者同士切磋琢磨して静岡県のサッカーを強化していきたい。

最後に、今回の研修に協力して下さったすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

新山 真悟 (浜松工業高校)

◆ サッカーの源流と指導者の関わり

1. サッカーの原点

今回のドイツ研修の中で一番感動したゲームは、「オランダ VS トルコ」でもなく、ロシア MG の U-17 のゲームでもなく、「デュイスブルク U-11 VS VVV フェンロ U-11」のゲームであった。そこにはサッカーの全てが詰め込まれていて、プレーしているのも子供ではなく、まさしく 1 人 1 人のサッカー選手であった。選手たちは、ゴールを奪うこと、ゴールを守る、ボールを奪うことに全身全霊を傾けていた。ピッチのどこを見ても 1 つのボールを全力で追いかけ、チームの勝利を目指してひたむきに取り組む姿が見られた。また、**ベンチ、観客(保護者)が一体となった独特な雰囲気**が少年を **1 人の自立した選手に引き上げているのではないか**。それもサッカーの歴史と文化の成せる技なのかもしれない。このように、この年代から当たり前のように、サッカーの原点に立った勝負にこだわる姿

勢を持ちトレーニングやゲームを行っていくことが、欧州チームの強さの秘訣の中の1つであろう。

2. 指導者の自信を持った立ち振る舞い

今回のドイツ研修の中で、ボルシア MG のアカデミーのトレーニングを多く見学させてもらった。更にボルシアのコーチとのディスカッションを通して感じたことは、チーム哲学に裏打ちされた指導者の自信を持った立ち振る舞いがあるということだ。ディスカッションをさせてもらったコーチの中の1人、ハンス氏は23歳という若さでありながら、サッカー指導に対して自信が溢れている印象を受けた。彼が非常に勤勉で学びを大切にしているのはもちろんであるが、一貫したトレーニングメソッド・クラブ哲学に基づいた指導が確立されていることも大きな要因であると思う。内容を見てみると、トレーニングのメニュー自体はシンプルなものが多いが、ポイントが明確であり、サッカーの原点であるゴールを奪う、ゴールを守る、ボールを奪うということが常に TR の中にあり、常にその中に競争がある。日本では、どこかで流行の TR や変わった TR をすることに満足して、本当に大切なものが忘れ去られてしまっている気がする。そして、TR の中でも選手がボールに触れる、扱う、蹴る時間が絶対的に多い。90分の TR の中では、効率よく2グループに分けられ、少人数で実施し、限られた時間の中で集中させ、運動量を確保しながら技術を向上させていく工夫がされていた。また、**指導者の子ども達への働きかけ、声かけは全てがポジティブなものであった。**これにより、選手の取り組みは非常に積極的で、常にポジティブなものになっていたように感じる。やはり、**指導者の姿勢はそのまま選手に反映されるのだと改めて気づかされた。**指導者は、常に選手とともにあり、指導者のサッカーに対する姿勢はそのまま選手に還元される。そのことを忘れず、今後も常に学びを怠らず、自チームまた、静岡県発展のために力を尽くしていきたいと感じた。

最後に、今回このような研修の機会を与えてくださった関係者の皆様に深く感謝をし、振り返りいたします。ありがとうございました。

植松 弘樹 (島田商業高校)

3. 報告

I・・・スカウティングシステム

2015/03/25

テーマ：育成年代のタレントスカウティング

講師：ボルシア MG U12 監督 ハンス氏

■目的

ボルシア MG の育成年代におけるスカウティングシステムを知るとともに、そこから学べることを考え、今後の選手発掘と育成に活かす。

1 タレントスカウティングとは？

過程：

- 1 チーム同士・指導者同士のネットワークを大切にする
- 2 情報が入ったら見に行く
- 3 その選手は何ができるか評価する
- 4 その選手の将来性を見る
- 5 スカウト選手と自チーム選手を比較する
- 6 チームに招待する（家庭状況を考慮）
- 7 プロからの逆算で選ぶ

1.1 ネットワークとスカウティングシステム

- ・ 2歳年下のカテゴリーの選手まで見る
- ・ 6人の専属スカウト（U13まで担当）が100km圏内にいる
- ・ U14-19からは、ドイツ全土を担当するアカデミー専属スカウトがいる
- ・ 1年に1度、誰でも自己推薦でボルシアMGのトライアウトに応募できる日を作っている。各年代で2人はチェックが入る（スプリント・1VS1・シュートを見る）

1.2 選手へのアプローチ

- ・ 1・2回目は1人のスカウトの目で、3回は違うスカウトの目で見ると見る

1.3 評価の仕方

- ・ 4つの項目
戦術理解度 運動量力 テクニック 性格
- ※それぞれさらに4つに細分化 計16項目
- ・ 10点満点（基本3～7の評価点）

- ・各項目で平均を出す
- ・合計平均4点以下は取らない。5点以上は再チェック。
6点以上は将来性抜群と判断する

1.4 注意点

- ・11 VS 11でも生きるのかを見る
- ・敏捷性やプレーのテンポ (Tempo) がどう伸びるのかを見る
- ・現代サッカーに適しているのかを見る

1.5 選手をボルシアMGに招待した時の注意点と自チーム選手との比較

- ・プレーのテンポを見る
- ・1 VS 1、4 VS 4をさせ、自チーム選手と比較する
- ・チームに溶け込んでいるか (オン、オフザピッチの両方)

1.6 チームへの順応

- ・前所属チームとのギャップ (移動方法・ホームシックなど)

※まずは近い場所の遠征に行かせて慣れさせていく

- ・1年間しっかり見る (MGに入れることは成功なのか?を見極める)
- ・あらゆることを押し付けない、できるだけフリーにさせる
- ・学校 VS サッカー

選手の通う学校がチームに合わせてくれるのか?

(午後はチームの活動をさせてくれるのか、など)

※ここが一番の問題である

1.7 入団後のケア

- ・ (ボルシアMGだけでなく) いろんな場所でのプロの可能性を探ってあげる

2 タレントとは?

導入として、2人の選手のビデオを見せる

①タレントではないビデオ

U15 ぐらい テクニックと運動能力はあるが平均的な選手

②タレントのビデオ

ポグバ / PSGの選手 / ロイスやゲッツェ

つまり「決断力のある選手」

- ・パッと見ての能力
- ・4つの能力

テクニック／空間認知能力／状況に応じた判断力／敵がいる状況での判断力

3 タレントスカウトの基準

3.1 テクニック

- ・ドルブル
- ・パスとシュート
- ・コントロール
- ・両足使うこと

3.2 戦術理解度

- ・攻撃の1 VS 1 の処理の仕方
- ・守備の1 VS 1 の対応
- ・ボールをどれだけ大切にするか
- ・相手がボールを持っているときの対応

3.3 運動能力

- ・速さ
- ・クイックネス
- ・決断力
- ・コーディネーション 狭いエリアでの体の使い方

3.4 性格

- ・サッカーへの取り組み方（本気でやっているか）
- ・学ぶ姿勢（監督やコーチへの忠誠心）
- ・チームに対する姿勢
- ・リバウンドメンタリティ（ミスした後の姿勢）

4 スカウティングの際によく起こる問題点(気を付けている点)

①ステレオタイプ（固定観念）

- ・SHは速い。
- ・CBは大きい。

②ハロー効果

- ・良い面と悪い面について、それだけを際立たせない。1つの側面だけではなく、全体を見る。

例) 足の速いがボールコントロールは苦手な選手

③優位性効果（第一印象はその後に受けた印象よりもはるかに強力なので、忘れたり修正されたりする可能性が小さくなる）

例）開始1分で3人抜いたプレーをした選手がいて、その後のプレーがデタラメでもOKではなく、プレー全体を見ることが大切。逆場合も同様である。

④親近性効果（一番最後が物事の印象に残りやすい）

・最後のプレーだけで判断しない。

⑤対比

・加入した後に、やれるだけの力があるのか見極める。

5 タレント=プロなのか？

～ドイツでは「30%の才能と70%の努力」。ゲッツェに1VS1の守備を強くいけと言うことはなかった。だからあのような選手が生まれた。しかし、彼のような選手ばかりではチームは成り立たない。～

プロになるための要素

・才能

・規律

・勤勉さ、真面目さ

（プレー中に走るか、集合する時に走るか、道具の持ち運びをしっかりとやるか）

・社会性

（ロッカールームでの振る舞い、チームメイトとうまくやれているか、感謝の気持ちを行動で表しているかどうか）

・ケガや病気に強い

（以前、ほとんどやらない飛び級を（5人に）させた時に、大事な時期にケガをしてしまい、結局全員プロになれなかった事例があった。）

・サッカーインテリジェンス

決断力が重要。自分で気づいて正しい決断を下していけることが理想。

6 タレントスカウティングの成功例（スカウティングが成功してプロになった）

①ガレス・ベイル（レアルマドリード）

15歳でイングランドに10数億で買い取られた。15歳のためにそれだけのお金をかかえて買い取ったことが成功。

②リオネル・メッシ（バルセロナ）

バルサの決断は間違いではなかった。

③テアシュテーゲン（バルセロナ）

6歳からMG、8歳でGKとして固定させた。

7 タレントスカウティングの失敗例

(スカウティングが失敗したがプロになった例)

①アンデルソン (マンチェスターU)

18歳で30億。18歳時は世界ナンバー1、しかし今は名前も聞かない。「うまいが、イングランドの速さに順応できない」というスカウティングが足りなかった。

②マルコ・ロイス (ドルトムント)

16歳でドルトムント加入も、その年に解雇。1つ別のチームを経て、ボルシアMGに来た。ボルシアMGから19億でドルトムントに復帰。16歳の時点でのスカウティングがしっかりしていれば、19億払う必要がなかった。

③??? (かつてシュツットガルト)

13歳時に2億でバレンシアへ移籍。当時はスーパーだった。しかし今はどこにいるか不明。バレンシアのスカウティングが失敗。

④???

ケルンからレバークーゼンへ移籍。近場のチーム同士で移籍したことが失敗。

8 まとめ

- ・スカウティングは過程が大切である
- ・見た目で判断しないで、例えば16項目のような細かい基準で判断する
- ・失敗例を生かす
- ・プロ=タレントのための要素は様々あることを忘れない

(報告者 佐藤)

Ⅱ・・・ポジション別トレーニング

2015/03/26

テーマ：ボルシアMGの育成組織とポジション別トレーニング

講師：ボルシア MG U15 監督 ビョーン氏

■目的

ボルシア MG の育成年代において大切にしていることを知るとともに、そこから学ぶことを考え、今後の指導に活かす。

○ボルシア MG のチーム構成と指導について

U-9、U-10、U-12、U-11、U-13、U-14、U-15、U-16、U-17、U-19、U-23、Top の 11 カテゴリーに区分されている。ビョーン氏によると、U-14 までの年代で「基本的な技術の習得」を大切に指導しているという。ドイツサッカー連盟 (DFB) と協力して、U-14 までの選手には「ボールコントロール」や「テクニック」を重視して指導している。

U-15 年代以降は、「**スペシャリストの育成**」に力を入れていく。ポジションをある程度固定していく時期になってくる。そこで、ビョーン氏からポジションごとの選手の特性を聞き出し、そのポジションのスペシャリスト育成のためのトレーニングを紹介していただいた。

○ポジションの概念

- 1 番…ゴールキーパー
- 2 番…右サードバック
- 3 番…左サイドバック
- 4 番、5 番…センターバック
- 6 番…ディフェンシブハーフ
- 8 番…センターハーフ
- 7 番…右サイドハーフ
- 11 番…左サイドハーフ
- 10 番…トップ下
- 9 番…センターフォワード



以上のように、番号によってポジションを表現している。番号によって表現することでポジションに与えられている役割が明確化されていると考察できる。

○ポジションの特性

4番、5番(センターバック)

ーオフェンス面で求められる要素ー

- ・ドリブル(運ぶドリブル)→スペースがあればゴールに向かってボールを運ぶ
- ・キックの質(インサイド、インステップ)
→長短のパスを正確に出すことができるかが求められる
- ・ボールコントロールの質
- ・足と判断の速さ

ーディフェンス面で求められる要素ー

- ・タックルの質→ファウルをしないでボールを奪えるか
- ・ゴールキーパーとの連携
- ・ヘディングの質

6番(ディフェンシブハーフ)

ーオフェンス面で求められる要素ー

- ・ドリブル(ゾーンへの侵入のドリブル)
- ・キックの質→長短すべてのパスを正確に出すことができるかが求められる
- ・ボールコントロールの質→360° どの方向にもコントロールできるようにすること
- ・判断の速さ

ーディフェンス面で求められる要素ー

- ・タックルの質→ファウルをしないでボールを奪えるか
- ・方向変換の速さ
- ・ヘディングの質

2番、3番(サイドバック)

ーオフェンス面で求められる要素ー

- ・走る能力と視野の確保→相手ゾーンの奥を常に狙う
- ・ドリブル(運ぶドリブル)→スペースがあれば前にボールを運ぶ
- ・ボールコントロール
- ・キックの種類

特にインサイドキック、浮き球のボールを操る技術

ーディフェンス面で求められる要素ー

- ・走る能力と視野の確保→動きながら周りを見ることができるか、背中の視野の確保
- ・タックルの質→ファウルをしないでボールを奪えるか

7番、11番(サイドハーフ)

ーオフェンス面で求められる要素ー

- ・走る能力と視野の確保→相手ディフェンスラインへの侵入
- ・ボールコントロール
- ・キックの種類(インサイドとインフロントキック、インステップキック、クロスボール)
- ・ドリブルの質→運ぶドリブルと対人のドリブル

ーディフェンス面で求められる要素ー

- ・走る能力と視野の確保
- 9、8、10番また2、3番との関わりの中で連携をとることが大切である
- ・タックルの質→ファウルをしないでボールを奪えるか

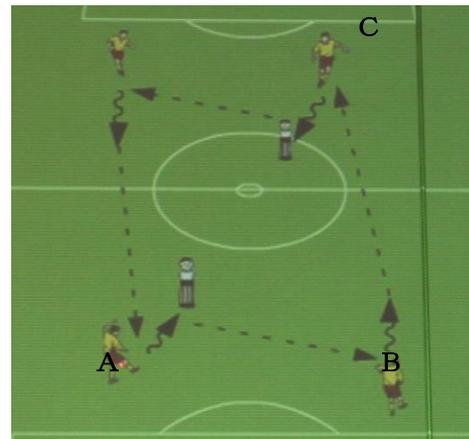
9番(センターフォワード)

- ・パス
- ・シュート
- ・ドリブル
- ・ヘディング(攻撃のための)
- ・ボールを失わない力(キープ力)

○ポジションごとのトレーニング内容

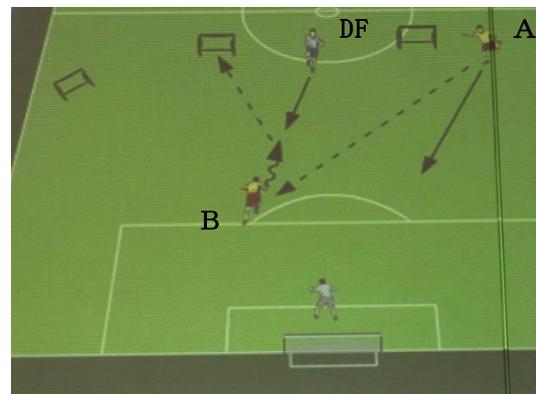
センターバックとサイドバック

- ・Aが目標物に向かってドリブル
- ・Aが目標物をかわしてパス
- ・BはAからのパスをコントロールしてドリブルからCへパス
- ・Cはボールコントロールをして目標物に向かってドリブル



センターバックとサイドバック

- ・1対1もしくは2対1
- ・AからBへパス
- ・Bはボールをコントロールしてドリブルをする
- ・DFはBへプレッシャーをかける
- ・BはDFのプレッシャーをかわしてゴールへパス
- ・場合によってはAがBのサポートをしてもよい



センターバックと中盤の関わり

- 4 対 3
- DF からのビルドアップ
- DF からスタートして前線の選手にボールを供給する



センターバックからの攻撃

- 6 対 6
- DF ゾーンは 2 対 1
- ボックスゾーン(中盤)は 3 対 3
- FW ゾーンは 1 対 2
- 各ゾーンへは 1 人まで増員可能



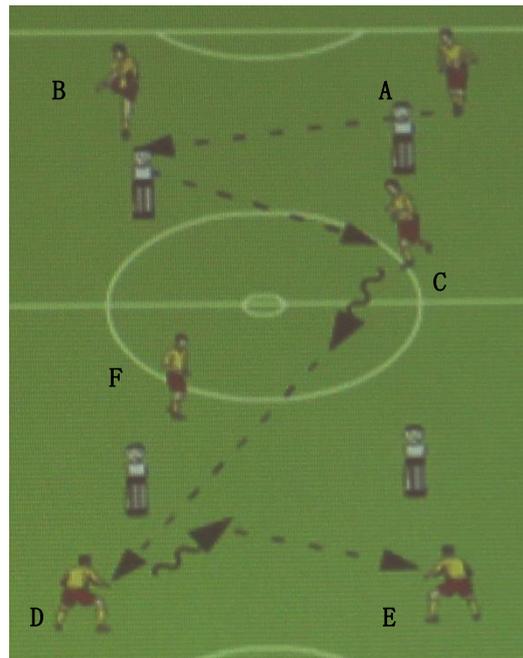
センターバック、サイドバックからの攻撃

- 6 対 6、3 ゴール
- DF ラインからのビルドアップ



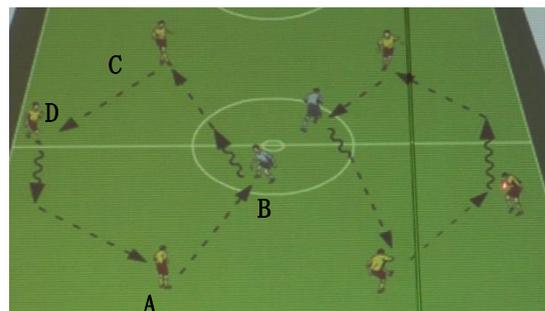
センターバックとボランチ

- A から B へパス
- B は C へパス
- C はターンをしてドリブルを開始
- C は D へパス
- D は障害物に向かってドリブル
- D は E へパス
- E は F へパス
- F は C と同じ動き



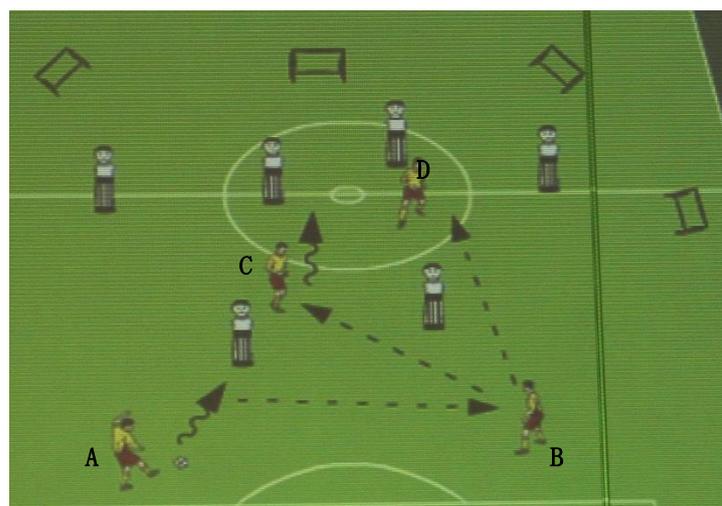
センターバックとサイドバック、ボランチ

- A が B へパス
- B はターンしてドリブル、C はパス
- C は D へパス
- D はドリブル、A へパス



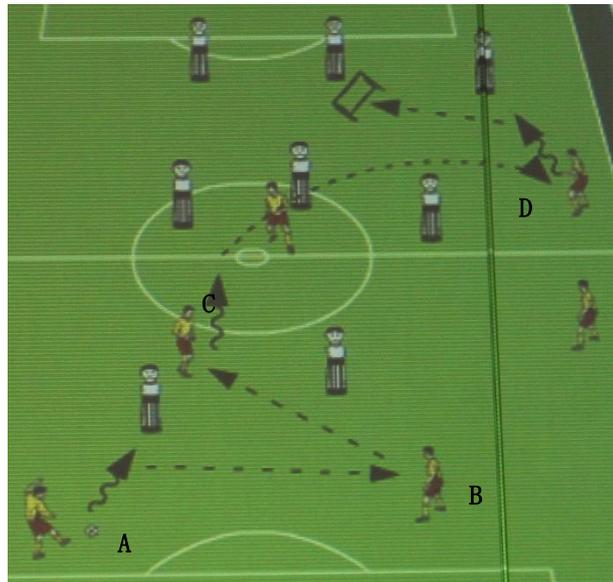
センターバックとボランチ

- A は障害物に向かってドリブル
- B は C、D を選択してパス
- C、D はドリブルして障害物をかわす、その後ミニゴールにパス



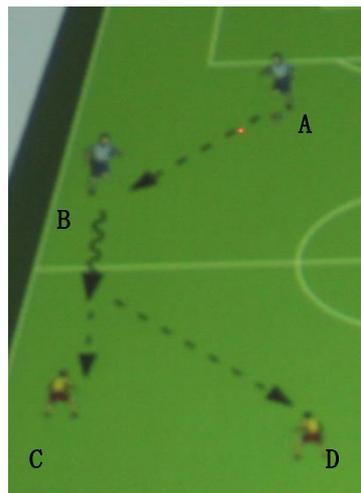
センターバックとボランチ、サイドバックまたはサイドハーフ

- A は障害物に向かってドリブル、その後 B へパス
- B は C へパス
- C はドリブルをしてサイドの D へパス
- D はドリブル後、ミニゴールへパス



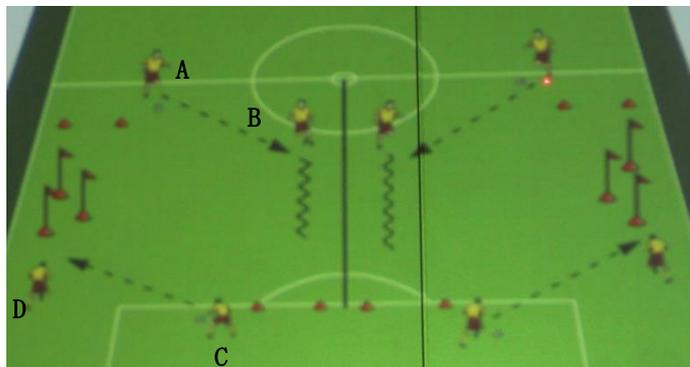
サイドバックとセンターバック、ボランチ

- A から B へパス
- B はドリブルをし、C か D へパス



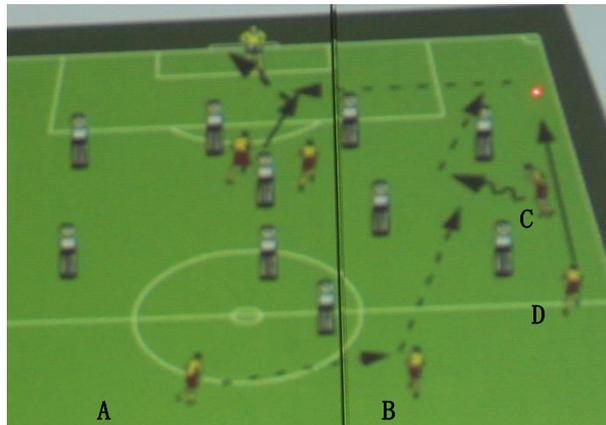
サイドバックとセンターバック、ボランチ

- A から B へパス
- B は直線的なドリブルをする
- C から D へパス
- D は障害物をかわしてドリブル



サイドバックとサイドハーフ、クロスからのシュート

- A から B へパス
- B から C へパス
(C はインサイドヘカットイン)
- C はオーバーラップしてきた D へパス
- D は中へセントリング
- FW2 枚がシュート



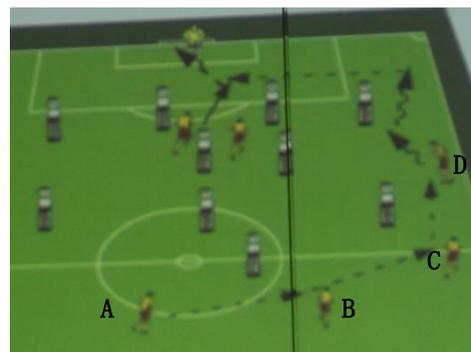
サイドバックを起点にしたゲーム

- 8 対 8
- センターバックからサイドバックへのパスからゲームがスタート



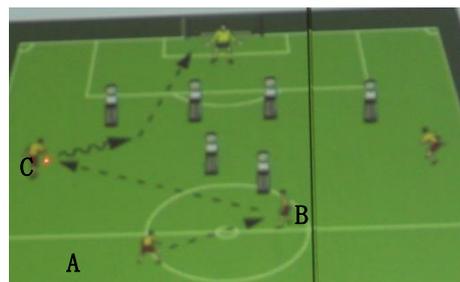
サイドハーフ、クロスからシュート

- A から B へパス
- B から C へパス
- C から D へパス
- D はドリブルで障害をかわしてクロス
- FW2 人がシュート



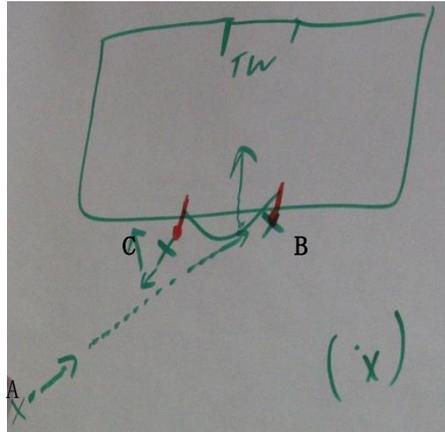
サイドハーフのシュート

- A から B へパス
- B は C へパス
- C はドリブルでインサイドヘカットインし、シュート



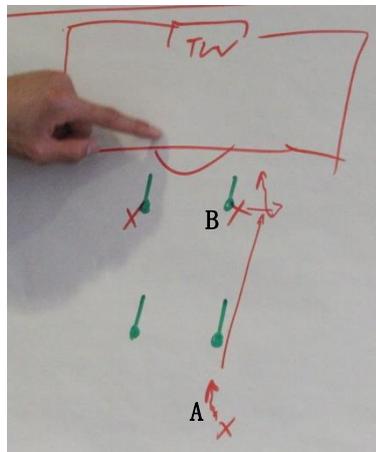
フォワードのシュート

- B、C が 2 トップのイメージ
- A から B へパス
- B は障害物から離れてボールを受けてシュート



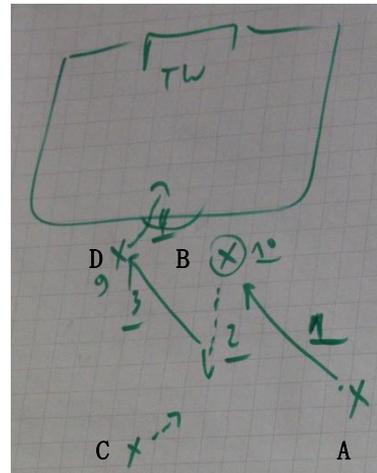
フォワードとボランチ

- A が障害物に向かってドリブル
- A は障害物をかわして B にパス
- B は A の動きを確認して動き出し、ボールを受けてシュート



フォワードとサイドハーフ、ボランチ

- A が障害物に向かってドリブルし、B にパス
- B は C にパス
- C は B がパスをするのに合わせて走り込む
- C は D にパス
- D は C がパスを出す前に動き出しをして受け、シュート



■ 考察

各ポジションのトレーニングを紹介してもらったが、日本で行っているトレーニングとの大きな違いはないように感じた。しかし、**ポジションの役割を明確化し、それをトレ**

ーニングに確実に落としこんでいる印象を受けた。イメージした選手を育成するために、選手に獲得させたい技術をトレーニングに取り入れていることがよくわかった。

私の指導を振り返ってみると、トレーニング中に様々な要素が入り込みすぎてしまって、トレーニングをしている選手が混乱していたのではないかと反省している。トレーニングを組み立てていく際には、トレーニングによって獲得させたいものを明確化し、確実に選手が理解できることが大切である事を実感させられた。大切なことは、難しいトレーニングを考えることではなく、**「何を選手に伝えたいか」「そのためのトレーニングはどのようなトレーニングか考え、実践する」**ことであると感じた。当たり前の事であるが、その大切さを実感させてもらえた気がする。

(報告者 新山)

Ⅲ・・・ボルシアMGアカデミーのトレーニング紹介

■目的

ボルシアMGの育成組織で行われているトレーニングを見学し、そこから学べることを考え、今後の指導に活かす。

■TR時間について

全てのカテゴリでTR時間は90分

[カテゴリごと日程と人数]

※P4 参照

※月・木は年齢の近いカテゴリのGKを集めてGKのみでトレーニングをする。

(木は途中から各カテゴリに合流) 集まる年代はU9～11。U12～14。U15～19。

※試合日程については全てトップチームの日程に合わせている。トップが試合の日は、アカデミーは試合を入れない。(アウェーの場合は試合を入れることもある)

[TR内容]

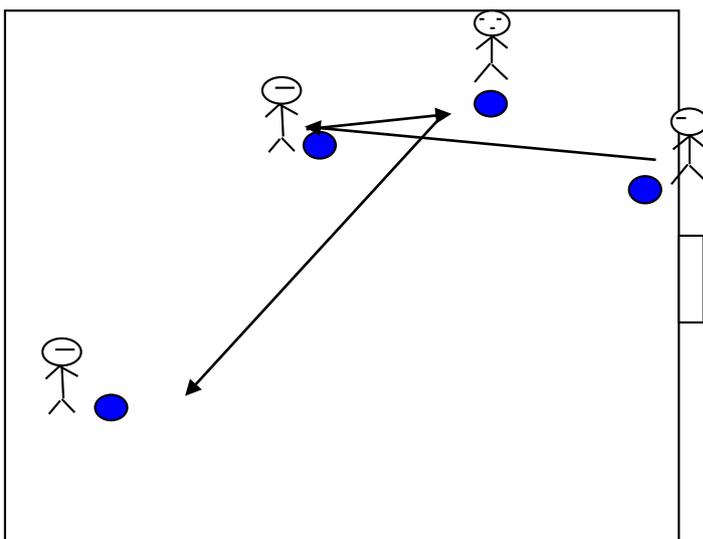
➤ ボルシア U10

トレーニング①

(やり方)

図のようにボールを動かし、シュートに行く。

シューター以外は1タッチ。

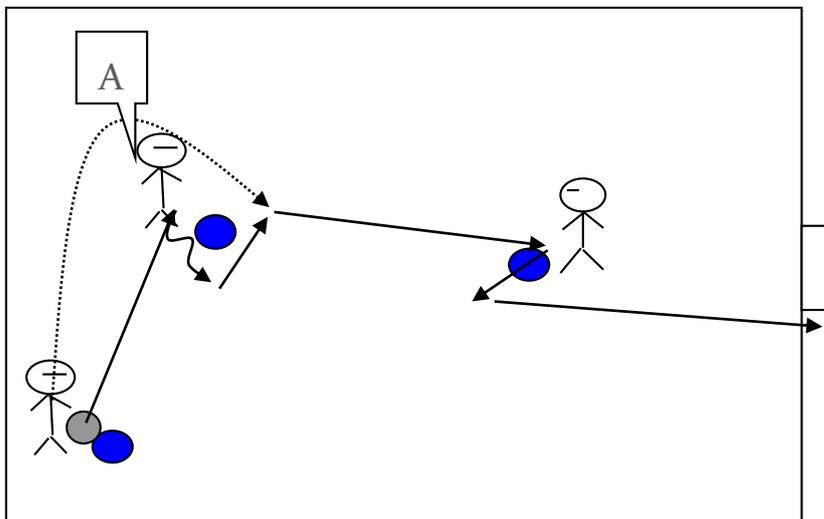


➤ **ボルシア U10**

トレーニング② (やり方)

図のようにパスを出し、シュートまでいく。

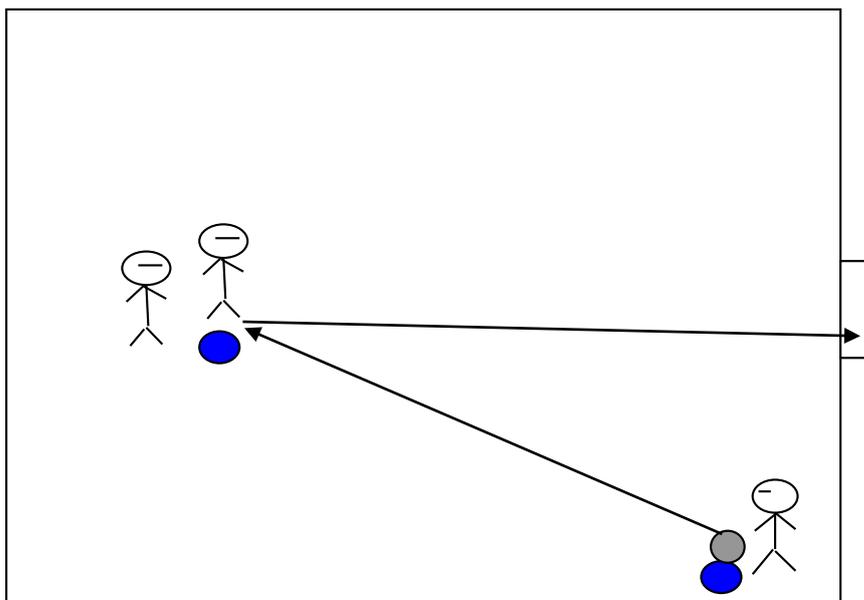
Aの選手は2タッチで。



➤ **ボルシア U13**

トレーニング③ (やり方)

図のようにボールを動かしシュート。シューターは2タッチ。



■トレーニングを見ての感想

U9～U14 まではトレーニングの雰囲気はとても和やかで、純粋にサッカーを楽しんでいるように感じられた。U17 からは、集中してトレーニングに打ち込む選手とそうでない選手に差があるように感じられた。**(映像あり)**しかし、どの選手にも試合では負けたくない、闘うというベースはあった。

ゲルマン魂とは、“走る”、“闘う”という意味である。そして、闘うという意味は、“諦めない”、“物理的な痛みに負けない”という意味である。どの年代の選手を見ても闘う事のベースはできていて、その上に技術や戦術がついていた。ボルシアの指導者に「闘えない選手を闘わせるようにするにはどうしたらいいか」と質問をしたら、「闘えない選手はドイツにはいない」という答えが返ってきた。また、ドイツのストリートサッカーを活性化すべくシュートパークやフットサル場を 2006 年ワールドカップの時にドイツ国内に 1,000 個作った。身近にある場所で勝敗がつき、簡単にサッカーに触れられる事はドイツのサッカー少年たちを育てていく上で大きなメリットだと感じた。

映像の最後の選手は、U13 だが、指導者も選手も一人の自立した選手として話し合いをしているように感じられた。U14 以下の選手たちは特に伸び伸びとプレーしていて大好きなサッカーをしにきているという印象がとても強くあった。練習の雰囲気もやらされている雰囲気は全くなく、自分が上手くなるために練習するという自立した選手が多くいると感じた。このような雰囲気作りの裏側には、“**選手に対してネガティブな発言や思考はほとんどない。**”ということディスカッションの中でボルシアの指導者が言っていたことを思い出した。トレーニングは日本と何ら変わらない。しかし、言葉で表すと簡単な言葉になってしまうが、“**練習の雰囲気**”や“**環境作り**”、“**文化**”が日本とは違うと感じざるを得なかった。

今回ドイツに行かせていただき、本場のサッカーに触れることができ、文化を感じることができたのは私のサッカー人生の中で大きな経験となった。是非行って、観て、感じて欲しいと思います。

(報告者 大久保)

映像に関しては下記の URL を参照下さい。

 <https://youtu.be/48dqkZdK9qE>

IV・・・ゲーム視察

試合分析：U11 リーグ戦 フェンロ（オランダ） 対 デュイスブルグ（ドイツ）
（2015.3.25） 9 対 9 ピッチサイズ 縦 72m×横 68m 審判 1 人（少年）

■目的・意図

育成年代のリーグ戦（U-11）を分析することで選手の動きや関係者（コーチ・保護者）の振る舞いを日本と比較し、今後の練習・試合の指導に活かす。

■報告対象：U10年代以上の指導者

■流れ及び全体像：ゲームの中にあつたもの

- ◆選手： 球際の激しさ・スライディング・マークを外す動き・スルーパス・フリーランニング・シュート・GKの守備範囲の広さ・GKからのビルドアップ・カウンター・ポゼッション etc
- ◆コーチ： ベンチからのコーチング・選手交代・ポジションチェンジ（違うポジションでのプレーの機会）・ハーフタイムのミーティング
一人一人へのアドバイス etc
- ◆保護者： 選手を鼓舞する声・良いプレーへの拍手・保護者の一体感 etc

■分析と発見

ユーロの予選、県選抜のゲーム、ボルシアU-17のゲーム、フェンロのトップチームのゲームを視察したが、研修員全員の心を動かしたのが、このU-11のゲームであった。まさしくサッカーの全てが詰まった内容であった。20分×3本の中に選手、コーチ、保護者が一体となった空気感に感動した。ドイツと日本のサッカー文化・歴史の差と言ってしまうとそれまでだが、目指すべき理想的なサッカーが詰まっていた。例えば、フェンロの⑦の選手は、ゴール前へのクロスの入りが「一度逆方向へマークを外して中へ入る動きをしていた。」他にも球際の1対1やスライディング、得点後の喜びもあった。U-11の選手であってもサッカーを理解し、駆け引きしながらサッカーをしていた。また、日本との大きな違いとしてGKの存在感があった。シュートストップはもちろんであるが、ゴールキックからのフィードもサイドを拡げて中央のCMFへパスを通すプレーもあった。そして、味方のCKの際には、センターライン付近にポジションをとり、常にゲームに関わっている姿を見ることができた。

指導者のこだわりや教えすぎ、教えなさすぎといった観点ではなく、あるべきサッカーの源流となるU-12年代のサッカーを観ることができたと感じた。

試合分析：U17 リーグ戦 ボルシア MG 対 ビクトリアケルン (2015.3.28)

■目的・意図

日本で言うプリンスリーグ (U17 の地域ごとのリーグ戦) から選手のテクニック、戦術行動、チームとしての戦い方を分析し今後の指導に活かす。

■報告対象： U12 年代以上の指導者

■分析と発見

ボルシア MG は 1-4-2-3-1 のシステムで戦っていた。ボルシアパークでのトレーニング視察やハンス氏やビヨーン氏のレクチャーからとゲーム内容が一本に繋がる内容であった。⑥番のポジションの選手はボールの展開能力に優れ、②番⑦番のサイドの選手はサイドを突破し、オーバーラップを仕掛けていた。⑩番の選手はタメを作りゲームのリズムを作っていた。④番の左 CDF は左足でクロスへ入れるキックの質が高くポジションと選手の特徴を生かしたゲーム展開であった。

明らかに日本や静岡と違うことは、ポジション毎の役割 (やるべきプレーと自分の特徴) を理解した上でサッカーをやっていることであった。

■提言

◆ポジション別のシチュエーションに合わせたトレーニングを実施することで、選手は試合の状況に応じたプレーの理解が深まり、ゲームで生かすことができる。

(型ありからの型破り、コンビネーションの構築)

※P24~32 参照

◆ポジションにおけるプレーの理解を深める。

(背番号でプレーの理解ができている状態)

(サイドとセンターの役割の違いや CDF と CMF の役割の共通点など)

試合分析：UEFA EURO2016予選 オランダ 対 トルコ (2015.3.28)

■目的・意図

オランダ対トルコのゲームからゲームの運び方と采配を中心に分析・考察し今後の指導に活かす

■報告対象： U12 年代以上の指導者

■ゲーム展開

ここまで4試合でそれぞれ勝ち点6と4の獲得にとどまり、チェコとアイスランドに水をあけられている両チーム。本大会出場に望みをつなぐためにはどうしても負けられない一戦であった。ファン・ペルシとロッベンを負傷で欠くホームのオランダだが、序盤からボールを支配してトルコゴールに迫る。なかなか完全な形では崩しきれないオランダに対し、トルコも速攻から効率的にチャンスをつながう。37分、右サイドからのクロスエリア内で拾ったボルカン・シェンが中央のブラクに渡すと、ブラクは細かいステップでマークを外して強烈な右足シュートを叩き込んだ。1点ビハインドで折り返した後半、オランダはナルシンを投入。代表デビュー戦となるドストも投入して1点を狙いに行くオランダだがゴールが遠い。必死の攻撃がようやく実を結んだのはアディショナルタイムの92分。ペナルティーエリア手前でマイナスのパスを受けたスナイデルがシュートを放つと、前に入っていたフンテラールが頭で触ってコースを変えようやくネットを揺らす。記録上はスナイデルの同点ゴールとなった。

■発見と分析

◆**ヒディング監督の采配**・・・ボールを支配するがチャンスが少ないオランダは、前半に先制点を許す。HTに⑧を交代し、中盤の構成を変化させる。それでも変化の見られないオランダは63分に⑥のデ・ヨングを交代し、⑱のバス・ドスト192cmを入れた。ここからは、サイドから徹底したロングボールを入れる戦いに変えた。その効果がアディショナルタイムのスナイデルの得点に繋がった。古さを感じるオランダのサッカーではあったが、勝利・得点の為に割り切った采配が見られたゲームであった。

◆**デ・ヨング、スナイデルのプレー**・・・ファン・ペルシとロッベンを欠く中、ピッチに立っていた22名の中で違いを見せたのは⑥デ・ヨングと⑩スナイデルであった。

⑥デ・ヨング：守備面においては予測からの素早いアプローチとボール奪取があった。

⑩スナイデル：常にフリーな状況でボールを受けるプレー。

(首を振りマークされないスペースを見つけている)

ボールを受けてからのプレーが早くキックの質が高いこと。

(正確なボールコントロールと相手・味方・スペース把握をしている)

(報告者 武田)

V・・・ボルシア MG コーチとのQ&A

3/24 ボルシア MG U15 監督 ビョーン氏

テーマ:ゲーム分析

Q：相手を踏まえた TR はどの程度やるか？

A：10 パーセント程度。自チームのコンセプトの TR がほとんどである。（相手や試合の重
要度により変わる）

Q：ネットワークシステムはどのように作っているのか？

A：ボルシアMGが専門会社と提携している

Q：決定力を上げるためには、何が必要か？

A：才能とサイズ。CFが出てくるまで待て（笑）。

Q：自チームのFWにどのようなコーチングをするか？

A：U15 としてはサイズのあるFWだが、反転が遅いので、そのテクニックを身に付けるよ
うコーチングしている。

オープンディスカッション ボルシア MG U15 監督 ビョーン氏 3/26 p.m.

（午前中はビョーン氏によるトレーニングセッション）

Q：静岡県選抜の印象は？

A：全体のレベルは低くはない。何人かの選手は良いレベルに達していた。

Q：練習中、選手を集めて話をする時、発問をよくしていたが、普段から行っているの
か？

A：発問形式の手法はよく取り入れている。静岡の選手は指名されれば答えるのに驚いた。
MGの選手は自分から発言する。それは協会も発信している。静岡の選手も積極性が欲
しい。

Q：ドイツでは、90分のTRでコーディネーショントレーニングは取り入れているか？

A：トレーニングの最初に10分程度取り入れている。トレーニング外でもショートダッ
シュなどを取り入れている。

Q : U15 年代では、できるだけ前からボールプレスをかける守備を学ぶのがいいのか、リトリートした方がいいのか、その両方がいいのか、どう考えるか？

A : 状況によって両方使えるようにした方がいい。守備側の人数が多ければボールプレスをした方がいい。そのために普段の学びと経験+パーソナリティで指導者自身の力を伸ばしていく必要がある。

U15-19 までのチーム監督は B 級以上のライセンスが義務付けられているが、指導者は、指導ライセンスを取るときに、協会の指針や誰かの哲学をコピーするだけではなく、自分独自の哲学を持つべきである。

Q : ドリブルトレーニング、ゴールを付けたトレーニングを MG ではよく見るが、ドイツでは主流なのか？

A : ドリブル・パス・コーディネーション・シュート、その週のテーマのトレーニング+ゲームで練習を構成している。このゲームでは、コーチは発言しないようにしている。

Q : ゲームフリーズはよくやるか？

A : よくやる。細かく伝えるようにしている。

3/25 ボルシア MG U12 アシスタントコーチ ハンス氏 テーマ : タレントスカウティング (育成年代)

まずは昨日の TR についてディスカッション。

Q : トレーニングの流れは、3/24 のようなものか？

A : 基本的な流れは、①アップ②テーマ練習の導入③テーマ練習④ゲーム。日曜の試合でのケガ人が多かった。また、前回の試合でシュートに対する意識が低かったので、シュート練習の時間を多くした。

Q : 相手なしのドリブルトレーニングについてどう考えるか？

A : アップ段階で相手をつけることはない。

Q : GK が一緒にトレーニングすることはどれくらいの頻度であるか？

A : 火木金に全体練習に混ざる、月木は GK 専用トレーニング (U12-14、U15-19 合同) をする。木は 1 時間 GK トレーニングをしてから全体練習に合流する。

Q : 最後のゲームでは、コーチングがほとんどなかったが、常にそのようなスタンスか？

A：状況によって変わる。5月末のシーズン終了を迎え、選手の見極めに入っている。そのため、選手の様子をよく見ていた。

Q：2004年以降の改革以降の変化はどのようなものか？

A：走る、闘うのみから、テクニック、敏捷性重視へ。また、今あるやり方とポジションに特化した練習を加えていく。闘う、走るは前提。11人全員が戦う・走るが特徴としていなくてもよい。アカデミー施設の見直しを行い、専属のプロコーチをアカデミーに配置しなくてはいけなくなった。

Q：ドイツの闘争心、ゲルマン魂とは？

A：絶対に諦めないこと。物理的な痛みに負けないこと。例えば、接触プレーなど。

Q：コンタクトプレーはどのように指導しているか？

A：今のチームはメンタル的に弱いので、あえて厳しく要求しているし、ファールがあってもとらないようにしている。

Q：ゴールにこだわる姿勢（ゴールに歓喜・悔しがる）は普段から植えつけているのか？

A：12歳は子供。週3回のTR（シャルケ・ドルトは週4回）なので、クリスマス会や誕生日パーティなどがあればそちらを優先させており、子供本来の楽しみなどを失わないように指導している。

Q：燃え尽き症候群のような選手は出るか？

A：ハンスが担当した中で、過去に1人だけ自分から退団を申し出た選手がいたが、ほとんどない。心理面をケアするスタッフがいる。

Q：毎年アカデミーから何人の選手がトップに上がるか？

A：1・2人は確実にいる。他チームと比べると多い。U19から2部や3部のチームに移籍することはない。トップに上がれない場合はU23（来季から3部）へ入る。自前のユース選手を7・8人プロ契約しなければいけないルールがある。

Q：日本でやるような1VS1のトレーニングはやるか？

A：U11-13で重点的に行う。火＝試合の改善 木、金のどちらかで1VS1は行う。5つくらいのステーションで行い、様々な形で1VS1を行う。

Q：シュート練習、ポゼッション練習はどれくらいやるか？

A：アカデミーの課題は得点力不足なので、シュート練習を多くやっていたのだろう。この時期はそうなりやすい。シーズン開幕当初は、新加入選手もいるのであまりやらない。ポゼッションはアップとテーマ練習の間に15分ほど組み込んでいる。

<ポゼッション練習の例>

6:2、8:3、10:4 時間は45秒でまわす。守備は奪ったら、ゴールへシュート

Q：選手を見る際、ハンスが大切にしている点は？

A：運動能力。テクニックは後からついてくる。トレンドとしてのテクニックの弊害として、テクニックを見せる選手が出てきた。サッカーの本質を知っている選手が必要。

Q：体格はスカウトする際にどの程度考慮するか？

A：MGは重視しない。アヤックスやドルトは大きい選手はいる。早熟な選手の弱点は、体格にまかせてプレーすることなので、まずは運動能力とテクニックを重視する。

Q：サッカーをする環境をどのように整えているのか？

A：2004年以降ストリートサッカーの促進を行い、フットサルコートを無料開放し、サッカーを身近にさせる取り組みを行っている。また、2006年以降、ドイツW杯での収益をサッカーに還元するために、DFBがフットサルコートを1000か所建設して、ストリートサッカーができる環境を作った。

Q：長谷部・内田はU12では発掘されなかった。ドイツでも遅咲きの選手はいるか？

A：いる。しかし発掘されない選手が出ないようにしている。

Q：選手をスカウトする時、運動能力とテクニックのどちらをとるか？

A：U12まではテクニック。U14以降は運動能力。

Q：ポジションによって重要視する項目はあるか？

A：U12ではポジションを決めていないので、基本的には、上記4つを重要視する。上記4つとは、**①テクニック②戦術理解度③運動能力④性格**である。

A：テアシュテーゲンやノイアーはU9ではFPだった。ある時GKをやらせたら、GKとしての資質を持ち合わせていた。GKもFPとしての能力も必要。

Q：「決定力」に対する認識は？

A：CFを育てるのは歴史も必要だ。ドイツの情報サイトには、U9-トップの情報が載っている。そこには、得点王の情報が最初にある。点を取れば、上に行けるシステムがある。マリオゴメスは評価されなくなっている。

Q：U12年代で、早熟の選手にロングボールを蹴る試合展開はドイツでも起こるか？

（日本は8 VS 8、ドイツは9 VS 9）

A：ドイツでも起こりうる。その選手がロングボールの入った時にどういう決断をしているかを見る。MG目線では、そういう選手はなるべく取らないようにしている。ドイツでもU15で選手が育っていない問題はある。

Q：「タレントを見る目」を養うために意識していることは？

A：失敗例を繰り返さないように意識している。最近は、特に社会性があるかないかを見極めている。不真面目な選手は攻撃の選手に多いが、チームにどう影響を与えているのかを見ている。

（報告者 植松）